

# 明・景泰帝の諡號について（1）

On Ming Emperor Jingtai's Posthumous Names (1)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## ABSTRACT

This paper investigates the matter of Ming Emperor Jingtai's posthumous name being changed three times. The study shows that each of the posthumous names reflects the feelings towards Emperor Jingtai of the emperors who bestowed them. In particular, the paper shows that in bestowing the posthumous name Jingdi, his nephew, the Chenghua Emperor, appeared to be lauding Emperor Jingtai, but in fact it was quite a critical posthumous name.

## はじめに

景泰帝（宣徳三年八月三日～天順元年二月十九日）<sup>(1)</sup>は、兄の英宗の長子（後の憲宗成化帝）を皇太子としたうえで、一代かぎりの皇帝という条件で帝位につく。英宗が土木堡で瓦剌<sup>オイラート</sup>の捕虜になり、そのまま連行されていったためである。勢いに乗じて北京にきた瓦剌<sup>ヤセ</sup>の也先から北京を守り抜き、国勢を盛り返した。ただし、即位してしばらくすると一代かぎりの約束を反故にして自分の子供に帝位をつがせるため、英宗の長子の皇太子を廃し自分の子を新しい皇太子

---

（1）景泰帝の呼び方は、史料によっては憲宗成化帝の贈った「恭仁康定景皇帝」から全体を統べる本来の諡（拙稿「建文帝の諡号について（1）」（『経済理論』第355号）の注（1）参照）の「景」字を用いて「景帝」と呼ぶものもあり、南明政権の贈った廟號の「代宗」を用いるものもある。拙稿では、年號の「景泰」によって「景泰帝」と呼ぶことにする。また、英宗については、最初の年號が「正統」で、復辟後は「天順」なので、廟號の「英宗」で呼ぶ。

に立てた。しかし、すぐにその新しい皇太子が亡くなる。そして景泰帝は、皇太子を定めないままに、いわゆる奪門の変がおこり、帝位を追われ、にわかに亡くなってしまう。

亡くなると兄の英宗によって帝號は廃されて「戾」と諡される。後に、いちどは廃嫡された英宗の皇太子（憲宗成化帝）が即位すると、帝位だけは認められ「恭仁康定景皇帝」と諡される。南明政權は、「符天建道恭仁康定隆文布武顯德崇孝景皇帝」と諡し、「代宗」という廟號を贈る。清政權では、憲宗成化帝の贈った「恭仁康定景皇帝」を用いる。

つまり、景泰帝の諡號・廟號はつぎのようになる。

英宗による：	戾（諡號）	廟號なし
憲宗成化帝による：	恭仁康定景皇帝（諡號）	廟號なし
南明政權：	符天建道恭仁康定隆文布武顯德崇孝景皇帝（諡號）	代宗（廟號）
清政權：	恭仁康定景皇帝（諡號）	廟號なし

清政權の見解になるが、欽定『明史』（乾隆四年〔一七三九〕刊本）の景帝紀論贊は、景泰帝をつぎのように評価する。

贊に曰く、景帝 恻愍（事態の差し迫る）の時に當りて、奉<sup>う</sup>けたる命もて居攝（幼い皇太子に代わって政務を処理する）し、旋いで大位を正し以て人心を繋ぐ。事の權（かり）にして其の正を得る者なり。篤く賢能に任じ、政治に勵精す。強寇 深く入るも、宗社 父安なり。再造の績 <sup>まこと</sup>良に偉なりと云う。而して乃ち易儲に汲汲たり、〔また、英宗を〕南内に深く錮（とじこ）め、朝謁 許さず、恩誼 惘然（冷淡）たり。終に輿疾（病氣を抱えて車に乗る）もて齋宮にあるに於いて、小人 間に乗じて竊發（事を起こす）す。事 起こること倉猝なりて、克く令名を以て終わらず。惜しいかな（『明史』卷十一・本紀第十一・景帝紀・論贊・九葉～十葉）。

景泰帝は、兄の英宗が捕虜になるという非常事態の時に、命ぜられて幼い皇太子に代わって政務を処理した。続いて皇帝に即位し、人心をつないだ。これは時宜に応じた仮の対応であるが正しい行為であった。そして有徳で有能な者を任命し、政務に精励した。強敵に内地に攻め込まれても、国家は安定した。再生の功績は、ほんとうに偉大だとすべきである。しかし、自分の子に帝位を継がすために、皇太子であった兄英宗の子（後の憲宗成化帝）を廃し、自分の子を皇太子にすることに汲々とし、また帰還した英宗を軟禁状態にし、謁見を許さず、冷淡であった。そうして景泰帝が病を抱えて齋宮に居る時に、小人が英宗を復位させた。この事はにわかに起こり、景泰帝はすぐれた評価を得て終えることができなかった、という。

非常時に即位し、適切に対処したことは評価する。ただし、兄の前皇帝英宗に対する処遇と皇太子の廢立とは否定的に評価される。そして最後に帝位を奪還されたことで、令名をもって終わらなかったとするのである。

この欽定『明史』の論贊で言及される景泰帝の即位・英宗に対する処遇・皇太子の廢立の問題は、景泰帝の諡號とおおきくかかわってくる。

英宗が復位してすぐに景帝は亡くなる。そのため、英宗が贈った諡號「戾」には、英宗の意思が示されている。さらに景帝によって一度は皇太子の地位を廃された憲宗成化帝は、「戾」を「景帝」に改める。景泰帝が正統な皇帝である以上、「戾」という諡では、不都合であったためである。ただし以下で検討するが、「景帝」という諡號には、憲宗成化帝の複雑な気持ちが示されている。また、南明政権においても、ある意図をもって明朝の皇帝の正式な諡號と廟號とが贈られる。なお、清政権では、憲宗成化帝の贈った「恭仁康定景皇帝」を用いる。

そこで拙稿では、まず景泰帝の即位から亡くなるまで間、主に景泰帝は英宗とその皇太子（後の憲宗成化帝）をどう取り扱ったを考え、続いて英宗と憲宗成化帝そして南明政権での諡號・廟號の決定の経緯を考えてみたい。そして、それぞれの諡號や廟號に込められた意味を検討するつもりである。

## (1)

まず、おもに『實錄』によって、景泰帝の即位・英宗の帰還・皇太子の廢立の問題をおおまかに考えてみたい。

## ①景泰帝の即位

馬貿易の問題から、<sup>オイラート</sup>瓦剌部が侵入してくると、当時権力を横専した宦官の王振の勧めで親征を決断した英宗は、

〔正統十四年七月癸巳（十五日）〕上（英宗） 郕王祁鈺（景泰帝）に居守を命ず（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百八十・「正統十四年七月癸巳」条）。

と「實錄」にあるように、正統十四年七月十五日に、郕王祁鈺（景泰帝）に留守を命じる。ところが土木堡で瓦剌部に包囲され、正統十四年八月十六日に英宗が捕虜になる。その報告が、北京に伝えられ、<sup>(2)</sup>朝廷は混乱する。

『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』の「正統十四年八月癸亥（十六日）」条につぎのようにいう。

〔正統十四年八月癸亥（十六日）〕時に京師 戒嚴（嚴重に防御態勢をしく）するも、羸馬（やせうま）・疲卒 十萬人に滿たず。心 恟恟たり。羣臣聚りて朝に哭し、戰・守を議（提案）し、南遷せんと欲する者も有り。尚書の胡濙 曰く、文皇の陵を定め、此に寢し、子孫に示すに不拔の計を以てす、と。侍郎の于謙 曰く、遷さんと欲する者は斬る可し。今の計を為すは、速やかに天下の勤王の兵を召し、以て之を死守せん、と。學士の

（2）陳建の『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』では、八月十七日に英宗が捕虜の報が伝えられると、すぐに贈物を持たせて英宗の返還を要求したという。

〔正統十四年八月〕十七日、上（英宗）の北狩の報 至り、京師 大いに震う。是の日、皇太后（英宗の生母の孫皇太后） 使に黄金・珠玉・袞龍・段匹などの物を齎すに、駝 八馬を以てし、<sup>オイラート</sup>〔瓦剌の〕<sup>ヤセン</sup>先先の營に詣り、車駕を還さんことを請う（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十四・「己巳 正統十四年八月十七日」条）。

陳循 曰く、于〔謙〕侍郎の言 是なり、と。衆 皆な曰く、是なり、と。而して禁中 尚お疑懼す。皇太后 以て太監の李永昌に問うに、對えて曰く、陵廟・宮闕 茲に在り。倉廩・府庫・百官・萬姓 茲に在り。一或（或者：あるいは）播遷すれば大事 去らん。獨ぞ南宋を監みざるや。因りて靖康の事を指陳す。辭 甚はだ切なり。太后 吾（悟）り、是れ由り中外始めて固き志有り。天下の臣民 車駕 北莫に之くを聞き、痛恨・號泣の已まざるなし、云う（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百八十一・「正統十四年八月癸亥」条）。

北京では防御態勢を敷いたものの、軍隊は整っておらず、朝廷内は、和・戦の議論を行なったり、南京への遷都を願い出たりする者もあった。尚書の胡濙は、この地は、永樂帝が陵墓を定められ、ここにお休みになって、後の者に、攻め込まれないようにしてくださっているという。侍郎の于謙は、遷都を願う者は斬るべきであり、いまは速やかに天下の勤王の兵を集め、北京を死守すべきであるという。學士の陳循がそれに賛意を示し、皆も同意した。しかし、内廷はやはり疑い懼れた。皇太后が、宦官の李永昌に訊ねると、あらゆるものがここにそろっております。一部の人間のいう遷都などしようものなら大事は去ってしまいます。どうして南宋のことを鑑となさらないのでしょうか、と答えた。そして開封が金によって占領された欽宗の靖康元年（一一二六年：靖康は元年のみ）の事を述べた。説明はたいへん適切であつたので、皇太后も覚悟をきめた。こうして朝廷の意思は固まった。また天下の臣民は、英宗の捕虜になったことを聞いて、痛恨して嘆き悲しまないことはなかった、という。

この記事によれば、宦官の李永昌も北京防御派におおいに貢献したようにとれる。しかし、王世貞（字は元美、号は鳳洲、又の号は弇州山人。江蘇太倉の人。明・嘉靖五年〔一五二六〕～萬曆十八年〔一五九〇〕。嘉靖二十六年丁未科（一五四七）二甲八十名の進士）が『弇山堂別集』（卷二十四・史乘考誤五）で述べているところによれば、事情はすこし異なるようである。王世貞は、この『實錄』の記事を「史に言う」として引用し、その後につぎのように述べる。

[以下のように] 按ず。所謂ゆる胡濙・于謙・陳循の説は之れ有り。第だ一時の劉文安（劉定之）・葉文莊（葉盛）諸公の記す所を攷えるに、俱に

✓（３）談遷（原名は以訓，字は孺木・仲木，号は射父・觀若・容膝軒・江左遺民。浙江海寧の人。明・萬曆二十二年〔一五九四〕～清・順治十四年〔一六五七〕）の『國權』にも同様に記されるが、僅かな文言の異同があり、人名と忠臣とのことが加えられている。

〔正統十四年八月癸亥（十六日）〕時に京師 戒嚴（嚴重に防禦態勢をしく）するも、羸馬（やせうま）・疲卒 十萬人に滿たず。人心 洶洶たり。羣臣 聚りて朝に哭し、戰を議（提案）す・守を議（提案）するありて未だ決せず。翰林侍講の徐理 天文を曉り、兵を談ずるを好み、南遷を唱う。禮部尙書の胡濙 曰く、文皇帝 鼎を此に定め、子孫に不拔を示すなり。尙お遷す可けんや、と。刑部侍郎の江淵 曰く、當に固く守るべし、と。兵部侍郎の于謙 曰く、遷を言う者は斬る可きなり。速やかに勤王の兵を召し、之を死守せん、と。學士の陳循 曰く、于〔謙〕侍郎の言 是なり、と。衆 皆な是とす。而して皇太后 禁中に疑懼す。太監の李永昌に問うに、對えて曰く、是なり。陵廟・宮闕 此に在り。倉廩・府庫・百官・萬姓 此に在り。南遷すれば、大事 去れり。且つ陛下 宋の靖康を聞かざるや、と。因りて靖康の事を述ぶ。皇太后 愴れり。是れ由り中外始めて固き志有り。天下の臣民 北狩を聞き、痛恨・號哭す。河州衛軍の周敖 慟くこと甚だし。七日 食せずして死す。子路 諸生爲り、之を聞き、儒の衣幘を易えず、奔りて家に至り、庭の槐に觸れて亦た死す（『國權』卷二十七・「英宗正統十四年八月癸亥（十六日）」条・一七七九頁：拙稿では『國權』は、張宗祥が校點し、中華書局によって一九八八年第二次印刷（一九五八年第一版發行）された活字本を用いる）。

また、『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』には「正統十四年十月朔」条のところに「是れ（十月一日）より先」のこととしてつぎのようにいう。

〔正統十四年〕十月朔、也先 上皇（英宗）を送りて京に還すを以て名と爲し、其の可汗の脱脫不花と紫荆關に入寇す。京師 戒嚴す。是れより先、太監の喜寧は胡種なりて、土木の敗もて、也先に降る。〔そして〕盡く中國に虚實を以て之に告げ、隨いて郷導と爲り、上皇（英宗）を奉じて紫荆關より入り、我が師を敗り、指揮の韓清等を殺し、都御史の孫祥 走げて死す。朝野 洶洶たりて、人 固き志無し。太監の金英 廷臣を召して計を問うに、侍講の徐理 占象を以て「京師 守る可からず、必須らく南遷すべし」と昌言す。〔金〕英 之を叱り、人をして扶出せしむ。明日、于謙 上書して抗言するに「京師は天下の根本なり。宗廟・社稷・陵寢 咸な在り。百官・萬姓・帑藏（國庫）・倉儲（倉庫中の糧食や物資） 咸な在り。若し一たび動けば、則ち大勢 盡く去れり。宋の南渡の事 監みる可し。一步も此を離れるを得ず」と。〔金〕英 〔于〕謙の言を是とし、衆に宣言して曰く、「死するは則ち君臣 同一の處に死すのみ。遷都を以て言を爲す者有れば、上命（君命）もて必ず之を誅せん」と。乃ち榜を出して曉諭（告知）し、衆心 稍や定まり、固守の議 始めて決す（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十四・「己巳 正統十四年十月朔」条）。

言う「侍講の徐理 召入され、南遷の議を<sup>とな</sup>倡う。而るに太監の金英 之を斥け出でしむ。學士の江淵 乃ち更に固守するの説を爲し以て<sup>こた</sup>對え、遂に大いに用いらるるを得」と。是の時に當り、内に〔金〕英 <sup>な</sup> 微く、外に〔于〕謙 <sup>な</sup> 微かりせば、幾んど揺動（動揺）せん。而れども史 皆な載せず。載せる所の李永昌の太后に<sup>こた</sup>對えるの語は、稗官（野史・小説）數十家 俱に及ばざるなり。按ずるに、修史は成化の初に在りて、李永昌 司禮を柄（掌握）し、方に貴重（高位）にして事を用い、而して嗣子の〔李〕泰（字は文通、順天香河の人。卒年四十三。正統十三年戊辰科（一四四八）二甲四十五名の進士）學士を以て史館に在り。〔李永昌の発言は〕溢美の談大抵 未だ信ずるに足らざるなり、と（『弇山堂別集』卷二十四・史乗考誤五）。

胡濙・于謙・陳循の発言はそのとおりである。ただ当時の劉定之や葉盛の記録したところを見ると、「徐理が南遷の議を<sup>とな</sup>倡え、宦官の金英がそれを斥けて退出させた。そして、學士の江淵が北京を固守するの説を述べて、ついに大いに用いられた」という。この時、内廷に金英・外廷に于謙がいなければ、動揺していたであろう。しかし史書はすべてを記載していない。ここに記録されてい

✓ (4) この皇太后は、宣宗宣德帝の皇后、英宗の生母の孫氏である。

孝恭懿憲慈仁莊烈齊天配聖章皇后孫氏、鄒平の人、會昌伯孫忠の女なり。初め貴妃と爲り、英宗を生む。宣德三年三月、立てて后と爲す。十年正月、英宗 卽位し、尊んで皇太后と爲す。正統十四年九月、郕王 卽位し、尊んで上聖皇太后と爲す。英宗復辟し、天順元年正月、尊んで聖烈慈壽皇太后と爲す。〔天順〕六年九月初四日 崩ず。景陵に合葬す（『山志』二集卷一・「大明世系」条）。

なお、もともとの宣宗宣德帝の皇后は胡氏であったが、宣宗宣德帝の強い希望で、宣德三年に皇后の位を孫氏に譲っている。

恭讓誠順康穆靜慈章皇后胡氏は、濟寧の人、錦衣都督胡榮の女なり。永樂十五年七月、<sup>た</sup>册てて皇太孫妃と爲る。仁宗 卽位し、進みて皇太子妃と爲る。洪熙元年六月、宣宗 卽位し、七月 立ちて皇后と爲る。宣德三年十二月、上表して位を貴妃孫氏に譲り、號を靜慈仙師と賜う。<sup>ママ</sup>三年三月、退き長安宮に居す。張太后（仁宗洪熙帝の皇后）其の賢なるを憐れみ、命じて清寧宮に居らしむ。正統八年十一月初五日 崩ず。天順七年七月、后位の號を復され、尊號を<sup>たてま</sup>上つられ、金山に葬らる（『山志』二集卷一・「大明世系」条）。

る宦官の李永昌と皇太后の問答は、数十の稗官（野史・小説）ともに言及がない。思うに『實録』の編纂は憲宗成化帝の成化年間の初めに行なわれた。その時、李永昌は内廷の司禮監を掌握し、高位高官として権力を握り、養子の李泰が大学士として編纂所にいた。そのため、李永昌の発言は自分をほめたたえるものとなったのであろう。ほとんど信じるに足りないものである、というのである。

ちなみに、土木堡で囚われてからも続けて英宗に随侍した袁彬（字は文質。江西新昌の人）の『北征事蹟』には、英宗は、十月十一日に、皇太后・景泰帝・文武の群臣に「虜の情を報じ、固く社稷を守らしむ」という書簡を伝えさせたという。

〔十月十一日〕上（英宗） 又た臣（袁彬）をして書三封を寫<sup>か</sup>かしめ、聖母皇太后、及び御弟皇帝、暨<sup>およ</sup>文武群臣に奉じて虜の情を報じ、固く社稷を守らしむ（『北征事蹟』 一卷・七葉：嘉靖年間袁氏嘉趣堂刻金聲玉振集本による。以下同じ）。

また、英宗は、祖宗社稷（国家）は大切である、軍馬を訓練し、謹んで国を守れ、とたびたび伝えさせたという。

上（英宗） 累しば臣（袁彬）をして書を寫<sup>か</sup>かせ、人を差<sup>つか</sup>わし京に回らしめ、御弟皇帝並びに文武群臣に〔書を〕與えるに、祖宗社稷 重しと爲す、好生（心して）馬軍を操練し、謹みて城池を守れ。我（英宗）を顧みることを要せず（『北征事蹟』 一卷・九葉）。

さて、このような状況のなか、英宗の親征にあたって留守を命ぜられていた郕王（景泰帝）は、八月十八日に、改めて皇帝代理を皇太后から命ぜられる。

〔正統十四年八月〕乙丑（十八日）、皇太后 郕王祁鈺に勅して曰く、邇者（ちかごろ）、虜寇の邊を犯し、皇帝 六軍を率いて親征す。已に嘗て爾朝百官に勅するに、今 尚お未だ國家に班師（凱旋）せず。庶務 久しく曠<sup>むな</sup>しくする可からず。特に爾に命じて暫らく百官を總べ、其の事を理めよ。爾 尚お夙夜 祗<sup>つつし</sup>み勤め、以て中外を率い、其の政を怠ること母れ、其の衆を忽せにすること母れ、欽しめ、と。又た文武羣臣に勅するに、凡そ合<sup>まさ</sup>



に行うべきの大小の事務は悉く王に啓（報告）し令を聽きて行なえ。違怠を致すこと母れ、と（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百八十一・「正統十四年八月乙丑」条）。

八月十八日に、皇太后は郕王（景泰帝）に敕していう。最近、北方の遊牧民が辺境を犯し、英宗皇帝は軍隊をひきいて親征された。すでに敕書をだして述べたようにまだ英宗皇帝は凱旋されていない。しかし政務はながらくそのままにはしておけない。そこで郕王はしばらく百官を統率し、政務を統べるようにせよ。夙夜つつしんで勤め、中外の官僚を率い、怠ることなく、衆を忽せにすることがないようにせよ、欽しめ、という。また、臣下の者には、執り行うべき大小の政務はすべて郕王に報告して決済をきけ、忽せにすることがないようにせよ、というのである。

ただ、この段階では、郕王（景泰帝）は、皇太后から英宗の代理として政務を執り行うように命ぜられただけである。

そして、八月二十二日になると、最近、北方の遊牧民が辺境を犯し、人々に害毒を与えたため、英宗皇帝はそれが国家全体に波及することを恐れ、やむなくみずから軍隊をひきいて、その罪を正そうとした。だが、はからずも囚われの身となってしまった。臣民に皇帝がいないことを思い、庶子三人のなかの年長ですぐれたものを選ぶに、それは見深であった。そこで、まず皇太子の位につけさせる。そして、郕王には続けて輔として、国政を統べ、天下を安定させる。国には君がいて、社稷は安んずる。君主には後継ぎがいて、臣民は仰ぐことができる。このことを天下に布告し、すべてに周知させよ、という。

〔正統十四年八月己巳（二十二日）〕皇太后 詔して曰く、邇（ちかごろ）

虜寇の邊を犯し、生靈に荼害（害毒をあたえる）することに困り、皇帝禍の宗社に連ならんことを恐れ、已むを得ず躬から六師を率い、其の罪を征正す。意わらずも虜庭に留められる。尚お臣民の主無かる可からざるを念い、茲（ここ）に皇庶子三人の中に於いて其の賢にして長なる者を選ぶに、「見深」といひ、正に東宮（皇太子）に位さす。仍お郕王もて輔と爲し、代わ

りて國政を總べ、天下を撫安さす。嗚呼、國に必ず君有り、而して社稷之が安きを爲す。君 必ず儲有り、而して臣民 仰ぐ所有り。天下に布告し、咸な聞知せしめよ、と（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百八十一・「正統十四年八月己巳」条：『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷之十四・「己巳 正統十四年」条では、八月二十日に掛ける）<sup>(5)</sup>。

まず、英宗の長子の見深（憲宗成化帝）を皇太子の位につけさせ、郕王にはそのまま代理として政務を執り行うようにというのである。

このように皇太后は、まず英宗の長子を皇太子の位につけさせてから、臣下の願いを聞きいれるという形式を取り、郕王に皇帝の位に即くよう命じる。八月二十九日のことである。

〔正統十四年八月〕丙子（二十九日）、文武百官 辭を合わせて皇太后に請うて曰く、聖駕 北狩し、皇太子 幼冲なり。國勢 危殆（危険）にして、人心 洶湧（動蕩して不安）たり。古に云う、國に長君有るは、社稷の福なり）と。請う大計を定めて以て宗社を奠めよ、と。疏 入り、皇太后 批答して云う、卿等 國家の大計を奏す。合に請う所を允すべし。其れ郕王に皇帝の位に即くを命ず。禮部 儀を具え、日を擇び以て聞せよ、と。羣臣 皇太后の旨を奉じて郕王に告ぐ。王 驚きて曰く、卿等 何為れぞ此の議有らん。我れ何の才・何の徳有りて敢て此れに當らん、と。退讓を

（5）『國權』卷二十七・「英宗正統十四年八月己巳」条は、つぎのように「茲於皇庶子三人之中選其賢而長者曰見深正位東宮」を「茲立皇長子見深爲皇太子」に作る以外はほぼ同じである。

〔英宗正統十四年八月己巳（二十二日）〕皇太后 詔して曰く、邇（ちかごろ） 虜寇の邊を犯し、生靈に毒害することに因り、皇帝 禍の宗社に連ならんことを恐れ、已むを得ず躬から六師を率い、其の罪を征正す。意わずも虜廷に留められる。尙お臣民の主無かる可からざるを念い、茲に皇長子の見深を立て皇太子と爲し、郕王もて輔と爲し、代わりて國政を總べしむ。於戲、國に必ず君有り、而して社稷 之が安きを爲す。君 必ず儲有り、而して臣民 仰ぐ所有り。天下に布告し、咸な聞知せしめよ、と（『國權』卷二十七・「英宗正統十四年八月己巳」条・一七八二頁）

請うこと再三なり。羣臣 固より請う。王 聲を厲しくして曰く、皇太子  
 在り。卿等 敢えて法を亂さんや、と。羣臣 止だ敢えて言わず、已に  
 して復た曰く、皇太后 命有り。殿下 豈に固く違わんや、と。兵部尚書  
 の于謙 颺言（声高に朗々と話す）して曰く、臣等 誠に國家を憂う。私  
 計を為する非ず。願わくは殿下 艱難を弘濟し、以て宗社を安んじ、以て  
 人心を慰めよ、と。言 益々懇切なり。王 始めて命を受く（『大明英宗  
 法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百八十一・「正統  
 十四年八月丙子」<sup>(6)</sup>条）。

八月二十九日、文武百官が、皇太后に、皇帝は北方に連れて行かれ、皇太子は  
 幼く、国勢は危機に瀕し、人心は動揺しています。古語に「國に長君有るは、  
 社稷の福なり」といわれています。どうか大計を定めて宗社を安定させていた  
 だけないでしょうか、と請願した。皇太后は、皆は国家の大計について申し出  
 てきたのでそれを認めたい。そして郕王に皇帝の位に即くよう命じ、禮部には  
 儀礼を備えさせて、日時を取り決めて報告せよ、と答える。群臣は皇太后の旨  
 を郕王に伝える。しかし、郕王は何故この提案があったのか、自分にどのよう  
 な才能や徳があって事に当たれるのか、といい再三辞退する。群臣は強いて請

(6)『國權』では、簡略につきのようにいう。

〔正統十四年八月〕丙子（二十九日）、羣臣 疏もて皇太后に請うらく、「國に長君有るは、  
 社稷の福なり」。宜しく郕王を立てて皇帝と爲せ、と。〔皇太后〕之を允す。郕王  
 駭き謝す。羣臣 固より請う。王 聲を厲しくして曰く、東宮 在り。卿等 敢えて  
 法を亂さんや、と。羣臣 止だ敢えて言わず、已に皇太后の意を述ぶるのみ。兵部尚  
 書の于謙 颺言して曰く、臣等 社稷の爲にす。私に非ざるなり。願わくは衆に従い  
 艱難を弘濟せよ、と。王 始めて命を受く（『國權』卷二十七・「正統十四年八月丙子  
 （二十九日）」条・一七八六頁）。

また、『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』では、つぎのようにいう。

〔正統十四年八月〕二十九日、皇太后 太監の金英を遣りて旨を傳うるに、皇太子  
 幼冲にして、未だ踐祚し、遽かに萬幾を理むる能わず。郕王 年長なれば、宜しく早  
 に大位を正し、以て國家を安んずべし、と。議する者、亦た時<sup>まさ</sup>方に多故にして、人  
 心 危疑するを以て、長君を得て以て禍亂を弭<sup>や</sup>むを得んことを思う。是に於いて、文  
 武群臣 交章して勸進し、日を擇び禮を行なう（『皇明歷朝資治通紀（皇明通紀）』卷  
 之十四・「己巳 正統十四年八月二十九日」条）

願する。郕王は声を荒げて、皇太子がいらっしゃるのに、どうして法を乱そうとするのか、という。群臣は何も言えず、ただ皇太后のご命令です、違おうとなさるのですか、と繰り返す。そして兵部尚書の于謙が声高に朗々と、臣等はほんとうに国家を憂いております、私事のためではありません。陛下にはどうか艱難を救い、宗社を安んじて、人心をお慰めになってください、という。言葉はいよいよ懇切であり、郕王ははじめて受諾した、という。

こうして皇帝となった景泰帝は、つぎのような即位の詔を出す。

〔正統十四年九月〕癸未（六日）、上（英宗）漠北に在り。郕王 皇帝の位に即き、遙かに上（英宗）を尊びて太上皇帝と爲す。〔景泰帝は〕詔して曰く、朕 皇考宣宗章皇帝の仲子を以て、藩を京師に奉ず。<sup>このごろ</sup>比、虜寇邊を犯し、大兄皇帝 禍の宗社に延ぶを恐れ、已むを得ず親征す。〔英宗は〕眇躬（皇帝の自称：景泰帝）に勅して百官を率いて居守さす。不幸にも車駕 誤りて虜廷に陷る。我が聖母皇太后 務めて臣民を慰めるの望みもて、已に皇庶長子見深を立てて皇太子と爲し、眇躬（皇帝の自称：景泰帝）をして輔代して國政を總べしむ。皇親公侯伯暨<sup>およ</sup>び在廷の文武の羣臣・軍民耆老・四夷の朝使、復た天位 久しく虚しく、神器（政權）主無しく、人心 遑遑（不安定）たりて、之が底定（安定）莫きを以て、辭を合せて上請（願い出る）するに、蚤く<sup>はや</sup>大計を定めん、と。皇太后 太子の幼冲にして、未だ遽かに萬幾を理めざるを以て、命を眇躬（皇帝の自称：景泰帝）に移し、天下に君臨さす。<sup>たま</sup>會たま虜中より還るもの有り、大兄皇帝の詔旨を口宣（帝王の命を口頭に宣布する）するに、宗廟の禮は 久しく曠く<sup>むなし</sup>する可からず。朕の弟の郕王は年長にして且つ賢なり。其れ統を繼ぎ以て奉祀せしめよ、と。顧みるに痛恨の方殷（ちょうど盛んな時）にして、豈に遵承の遽かに忍ばんや。避讓すること再三なりと雖も、俞允（『書經』堯典：承諾）を獲る莫し。付託の至りて重きを仰ぎ惟いて、敢えて涼薄（淺薄）<sup>つつし</sup>を以てして固より辭せんや。已に九月六日に於いて、祇みて天地宗廟社稷に告げ、皇帝の位に即き、使を遣りて虜に詣り問安し、大兄皇帝に尊

號を上つりて太上皇帝とし、徐むろに迎復を圖る。政を為すの道は、必ず先ず始めを正す。其れ明年を以て景泰元年と為し、天下に大赦す。咸な與に維れ新たにし、一切の合<sup>まさ</sup>に行なうべきの事宜もて後に條示す。[……………]於<sup>あ</sup>戲<sup>あ</sup>、惟だ敬にして仁誠のみ以て宗社を安んず、惟だ恭にして儉勤のみ以て萬民を恵す。尚お宗室・叔祖・叔父の協心（同心）に藩屏するに頼る。爰に中外の文武の賢臣と同德（同一の目的のために努力する）に匡輔（匡正輔助）し、弘く重大の艱を濟い、永しえに雍熙（和樂昇平）の治を隆とす。天下に布告し咸な聞知せしめよ、と（『大明英宗法天立道仁明誠敬昭文憲武至德廣孝睿皇帝實錄』卷之一百八十三・廢帝郕戾王附錄第一・「正統十四年九月癸未」<sup>(7)</sup> 条）。

正統十四年九月六日の段階では、英宗は漠北に居られつづけたままである。郕王が皇帝の位に即いて、遙かに英宗を尊んで太上皇帝とした。景泰帝は以下のように詔を出した。朕（景泰帝）は宣宗宣德帝の仲子であつたので、北京で藩邸をいただいた。最近、北方民族が辺境を犯し、兄の英宗皇帝は禍の国家全体に波及することを恐れ、やむなくみずから軍隊をひきいて行かれた。その折、眇躬（皇帝の自称：景泰帝）に臣下のものをひきいて留守をするように命ぜられた。不幸にも、英宗皇帝は誤って囚われてしまわれた。我が皇太后は、臣民の気持ちをおさめるために、英宗皇帝の庶長子の見深を立てて皇太子とされ、眇躬（皇帝の自称：景泰帝）を代理として国政を統べさせた。すべての人たちから、空位のままで、政權の主がないことから、人心が不安定で、安んずることないために、速やかに大計を定めるよう要請が行なわれた。また、皇太后は太子の幼く、すぐには政務を執り行えないことから、眇躬（皇帝の自称：景泰帝）に命じて、天下に君臨させた。さらに、虜よりかえるものが出て、英宗の詔を口傳して「宗廟の儀礼（政治を執り行うこと）は、空白にはできない。朕（英宗）の弟の郕王は年長で賢者である。郕王に皇位を継がせて政務を執り行わせよ」といってこられた。思うに痛恨のいたりであり、すみやかにお受けするに忍びないことである。辞退すること再三であつたが、承諾されなかった。負託

の重きを仰ぎ思いつつ、あえて至らない身ではあるが辞退できようか。そこで九月六日につつしんで天地宗廟社稷に告げて、帝位に即き、兄の英宗に使いを出し慰撫して、太上皇帝と尊號を差し上げ、徐々にご帰還を謀りたいと思う。政治は最初を正そうとする。そこで来年を景泰元年とし、天下に大赦する。すべてを新しくし以下で行なうべきことを列挙する。[……………] ああ、敬であって仁誠であってのみ宗社を安んず、惟だ恭であって儉勤であってのみ以て萬民を恵することができる。宗室・叔祖・叔父などの宗室の皆さんには一致して助けていただきたい。中外の文武の賢臣と一緒に努力して助けあい、ひろくこの

✓ (7) 『國權』も、つぎのように記し、ほぼ同じである。

[正統十四年九月] 癸未(六日)、上(英宗) 漠北に在り。郕王 皇帝の位に即き、遙かに上(英宗)を尊びて太上皇帝と爲し、詔して曰く、朕 皇考宣宗章皇帝の仲子<sup>このごろ</sup>を以て、藩を京師に奉ず。比、寇 邊を犯し、大兄皇帝 禍の宗社に延ぶを恐れ、已むを得ず親征す。眇躬(皇帝の自称:景泰帝)に敕して百官を率いて居守さす。不幸にも車駕<sup>あやま</sup> 悞り虜廷に陷る。我が聖母皇太后 務めて臣民を慰めるの望みもて、已に皇庶長子見深を立てて皇太子と爲し、眇躬(皇帝の自称:景泰帝)をして輔代して國政を總べしむ。皇親公侯伯<sup>およ</sup>暨び在廷の文武の羣官・軍民耆老・四夷の朝使、復た天位久しく虚しく、神器 主無きを以て、人心 皇皇たり、之が底定(安定)莫し。辭を合せて上請(願い出る)するに、蚤く大計を定めんと。皇太后 太子の幼冲にして、未だ遽かに萬幾を理めざるを以て、命を眇躬(皇帝の自称:景泰帝)に移し、天下に君臨さす。<sup>たま</sup>會たま虜中より還るもの有り、大兄皇帝の詔旨を口宣(帝王の命を口頭に宣布する)するに、宗廟の禮は 久しく曠くする可からず。朕の弟の郕王は年長にして且つ賢なり。其れ統を繼ぎ奉祀せしめよ、と。顧みるに痛恨の方殷(ちょうど盛んな時)にして、豈に遵承の遽かに忍ばんや。避讓すること再三なりと雖も、俞允(『書經』堯典:承諾)獲る莫し。仰ぎ惟うに付託<sup>つづし</sup>の至りて重きを。敢えて涼薄(淺薄)を以て遽かに辭せんや。已に九月六日に于いて、祇みて天地宗廟社稷に告げ、皇帝の位に即き、使を遣りて虜に詣り問安し、大兄皇帝に尊號を上つりて太上皇帝とし、徐むるに迎復を圖る。政を爲すの道は、必ず先ず始めを正す。其れ明年を以て景泰元年と爲し、天下に大赦す。咸な與に維れ新たにし、一切の合に行なうべきの事宜もて後に條示す、云云。於戲、惟だ敬にして仁誠のみ以て宗社を安んず、惟だ恭にして儉勤のみ以て萬民を恵す。尙お宗室の協心(同心)に藩屏するに頼る。爰に中外の文武の賢臣と同德(同一の目的のために努力する)に匡輔(匡正補助)し、弘く重大の艱を濟い、永しえに雍熙の治を隆とす、と(『國權』卷二十八・「英宗正統十四年九月癸未」条・一七九頁)。

なお、劉定之の『否泰錄』では、景泰帝の即位と英宗を太上皇としたことは、正統十四年九月七日に掛けている。

難局を救い、永しえに昇平の治世をおこしたいと思う。天下に布告して、皆に知らしめよ、という。

景泰帝は、至らないため、何度も辞退したもののやむなく即位したというのである。

皇太后は、最初に英宗の長子を皇太子にしてから、群臣の請願によるという形式をとって、景泰帝を即位させたということは、この即位は、一時的なものであり、皇統はあくまでも英宗に伝えられ、景泰帝のつぎの皇帝には英宗の系統のものに復帰させるという意図のもとに行なわれたと考えられる。

さて、「資治通鑑綱目」の正統観からすると、この即位継承はどう評価されるのであろうか。清政権が、朱子の『資治通鑑綱目』の義例に則って編纂させた『御撰資治通鑑綱目三編』<sup>(8)</sup>（乾隆十一年（一七四六）御製序：二十卷本）の景泰帝の即位の条は、つぎのように記される。

九月、皇太后 郕王に位に即くを命ず。赦す（『御撰資治通鑑綱目三編』（二十卷本）巻七・五葉・「明英宗十四年」条）。  
と記される。

---

（8）乾隆帝の上諭によると『御撰資治通鑑綱目三編』は、つぎのような意図をもって編纂された。

乾隆四年八月初七日、内閣 奉けたる上諭に「つぎのようにいう」。編年紀事の體は『春秋』に昉まり自る。宋の司馬光 前代の諸史を彙め『資治通鑑』を爲り、年もて經し月もて緯し、事實 詳明なり。朱子 之に因り『通鑑綱目』を成す。書法 謹嚴にして聖人の褒貶是非の義を得。後人の續修する『宋元綱目』は、上 紫陽（朱子）を繼ぎて正史の紀傳と相い表裏を爲し、檢閱に便なり。洵に少く可からざるの書なり。今、武英殿 『明史』を刊刻し將次に告竣せんとす。[そこで] 應に朱子の義例に仿いて『明紀綱目』を編纂し、傳えて來茲（今後）に示すべし。滿漢の大臣に著して職名を開列さし、朕の酌（選取）を候て。總裁官を派し、其の事を董率（統率）せしめよ。其れ愼みて儒臣を簡び、分修する及び開館編輯を任すの事宜を以て大學士 詳議して具奏せよ。特に諭す。此れを欽め、と（『御撰資治通鑑綱目三編』（二十卷本）・卷首）。

ここからすると『御撰資治通鑑綱目三編』は、朱子の『資治通鑑綱目』の義例によって、明朝の史実を述べた書物であった。



「資治通鑑綱目凡例」<sup>(9)</sup>(以下、凡例の葉数は、清・康熙四十六年〔一七〇七〕揚州詩局刻本『資治通鑑綱目全書』による)の正統王朝の「即位」の凡例を見ると、

漢以後、創業・中興、曰王即皇帝位(漢以後、「創業」・「中興」は、「王皇帝の位に即く」と曰う)(凡例・「即位」条・十六葉)。

とある。

また、「赦」についても、

凡恩澤皆書、正統曰赦(凡そ恩澤は皆な書す。正統は「赦」と曰う)(凡例・「恩澤」条・二十三葉)。

とあり、正統王朝における行為であるとされる。

つまり、この記述は、正統な王朝の「創業」・「中興」の即位の書法であった。さらに正統な王朝における書法の「赦」を用いていることからしても、『御撰資治通鑑綱目三編』では、景泰帝のこの帝位は、正統な「創業」・「中興」の即位によるものと理解されているといえる。

また、郕王が監國になり、英宗の皇子の見深が皇太子に立てられたことは、つぎのように記される。

皇太后 郕王に監國を命じ、皇子の見深を立てて皇太子と爲す(『御撰資治通鑑綱目三編』(二十卷本) 卷七・五葉・「明英宗十四年」条)。

「資治通鑑綱目凡例」の正統王朝の凡例には、「命官」は、

凡正統、命官、曰以某人爲某、宰相皆書(凡そ正統の官に命ずるは、「某人を以て某と爲す」と曰う。宰相は皆な書す)(凡例・「封拜」条・二十五葉)。

とあり、「立太子」は、

立太子、曰立子某爲皇太子(立太子を立つるは、立「子の某を立てて皇太子と爲す」と曰う)(凡例・「尊立」条・十八葉～十九葉)。

(9)「資治通鑑綱目凡例」については、いろいろと議論が行われている。ただし、明・清になるとひろく朱子による『資治通鑑綱目』の凡例として認められていたようである。そこで、拙稿では『資治通鑑綱目』の義例を示すものとしてこの「凡例」を用いる。



という。

さらに、英宗を尊んで「太上皇帝」としたことは、つぎのように記される。

遙かに帝を尊んで太上皇帝と爲す（『御撰資治通鑑綱目三編』（二十卷本）  
卷七・六葉・「明英宗十四年」条）。

これも「資治通鑑綱目凡例」に、

凡正統尊立皆書尊，曰尊某爲某（凡そ正統の尊立は皆な「尊」と書して，「某  
を尊んで某と爲す」と曰う）（凡例・「尊立」条・十八葉）。

とあり、正統王朝における行為であると理解されている。

このように、いわゆる朱子学の『資治通鑑綱目』的な正統観から見ると、景泰帝の即位、英宗の長子見深の立太子、英宗に太上皇帝という称号を贈ったことは、すべて正統な行為であったと解釈されていた。景泰帝のこれらの行為は、『資治通鑑綱目』的な正統観からすると、批判されるものではなかったのである。

（つづく）